

中国

上海日僑中学生の終戦日記

京都府 影山 澈

一 戦時下の上海日本中学生

私は昭和六（一九三一）年二月、中国上海市で生まれたが、幼い頃から父の勤める上海東亜同文書院大学の校宅で、両親や中国人のアマ（お手伝い）の中で何不自由なく育った。

昭和十五年、父の転職で閘北宝昌路復興邸に転居し、第六日本国民学校から郊外にある日本中学校に入學した。綱領は「至誠・剛毅・努力」であり、軍隊調の厳格な教育であった。学校の近くには、中支派遣軍

第十三軍司令部の本部（登部隊）があった。

外地といえども国際自由都市である上海では、昭和十七年頃から戦時色が急速に進み、内地と変わらぬ軍国ムードとなっていた。中学一年時は軍事教練や柔剣道で鍛えられ、無蓋防空壕掘り作業に従事。二年になると講堂で手榴弾の火薬詰め作業、二学期には軍馬用草刈りに汗を流した。

ミッドウェー海戦の敗北、ガダルカナル島撤退、アッツ島・サイパン島玉砕、ビルマの敗退と、戦局は日に日に厳しくなり、邦人居留民も緊張、逼迫感にあえぎ始めてきた。先輩は海兵・陸士・予科練などに勇躍志願し、壮行会が勇ましく行われた。十九年中頃から、クラスの間がいつの間にか消えていった。先を見通したのか、大会社や官僚の家族は南京、北京、大

連、京城（ソウル）、釜山經由等で、ひそかに帰国していたのである。しかし、東シナ海、日本海や玄界灘は、既に敵潜水艦の出没する海域となり、「行くも地獄、残るも地獄」の危険な様相を呈していた。

二 学徒動員令で上海江南造船所へ

東京大空襲、硫黄島玉砕、沖繩戦激化と悲報の続く中、昭和二十年三月下旬、「学徒動勞報 国隊員」として揚樹浦（ヤンズプー）にある三菱重工江南造船所に動員された。三月の身体検査では、私の身長は百三十七センチ、体重は三十二キロ、胸囲は六十六センチのガリガリのちびであった。

造船所工場では鋳物、旋盤、仕上の三班が組織され、私はちびで虚弱のためか仕上班となり、汗と油にまみれでこまめに立ち働いた。迫撃砲弾の羽けずり、二十五ミリ機関砲弾の銅巻プレス、機雷の部品組み立て、工員への連絡などが仕事であった。揚子江の支流、黄浦江の造船所横では、接収した外車のエンジンを取り付けたベニヤ板の特攻艇が、極秘で建造されていた。

勤務はまさに月月火水木金金であり、班組織の行動で、起床ラッパ、朝食、作業、昼食、作業、夕食、自習、消灯ラッパという毎日であった。バケツでの給食は、麦飯、大豆煮物、切り干し大根、わずかに肉が混ざる青菜と味噌汁、時折支給される海軍の甘い飴巻きは楽しみであった。某日、郊外の農村での迫撃砲試射会では不発弾が多く、中学生技術のお粗末さを露呈していた。

前年（昭和十九年）の十二月十九日の晴れた日に、工場東側の防空壕がB29に爆撃され、東亜同文書院大 学予科生六人が亡くなるという悲報も耳にした。このように、江南造船所は米軍の戦略爆撃目標だったので、我々動員学徒は常に死を覚悟していた。日増しに空襲警報も増え、寝ほけ眼で防空壕に駆けこむ回数も多くなった。

月二回の外泊は、日曜日夕刻帰宅、翌朝出勤という場合もあり、父母は精いっぱいの歓待をしてくれた。母はばら寿司やぼた餅を作り、父はかりん糖や糖衣ピーナツ等を茶缶にいっぱい詰めてくれた。十四歳の

少年にとつては、親の愛情をひしと感じ、家を出る時は常に今生の別れ、と名残惜しく心引き裂かれる思いであった。両親はそれ以上に辛かったに違いない。家から持参した菓子は寮では貴重品であり、鍵付きの鞆に入れて大切に保管し、就寝後布団に潜って密かに味わった。寮の大広間では、ストレス発散のためか、就寝時に突然集団で教師を布団蒸しにして、後でびんた制裁を受けるやからも多かつた。

同期の大矢謙吉君はじめ数人の学友は、二十年六月に、海軍甲飛十六期生として兵庫県宝塚航空隊に入隊した。後に知った事だが、終戦直前の八月二日、彼らを満載した機帆船住吉丸は、鳴門海峡阿那賀沖で米艦戦機グラマン六機に銃撃され、大矢君は惜しくもわずか十四歳で戦死した。

三 爆竹・玉音放送・海軍陸戦隊

八月六日、広島に新型爆弾が投下され、全市全滅の被害を被つたというニュースを耳にした。つい数日前には工場近くの楊樹浦ユダヤ人街が爆撃され、無惨にも傷口がパツクリと裂け、マグロのように並んだ十数

人の死体を目撃したばかりである。

九日払暁、突如としてソ連が日ソ中立条約を一方的に破棄して参戦し、火事場泥棒そのもので、満州、北朝鮮、樺太へと侵攻してきた。この日、長崎市には米軍新型爆弾が投下され、市は一瞬にして壊滅し、多くの非戦闘員である婦女子も殺戮された。

十一日夕方、工場の外では祝いの爆竹が連続音が響いた。もしや敗戦？ の不吉な予感が一瞬浮かんだが、慌てて否定した。休暇で夜半帰宅する。

十二日、路地の隣人邦人は相互に情報を入れ合い、落ち着かない。父は既に中国知人から情報を得ていたのか、終戦を予告する口ぶりであった。父の非国民的な軟弱な態度に私は強い反発を感じ、中二階の小部屋に閉じこもつた。

十三日、出勤すると工場周辺は朝からトラックが走り回り、車上では国民党の青天白日旗が激しく振られ、戦勝を祝う爆竹音で工場の窓は振動した。午後には日本憲兵のサイドカーが周辺一帯を巡察し始め、工場内の不安は高まった。

十四日午前、E教師より「本日、即時帰宅せよ。なお、来る十七日には海軍特別陸戦隊本部に集合のこと」と目的不鮮明な指示があった。「満州や大陸には百万の精銳がいる。陸戦隊は中支派遣軍と共に徹底抗戦するのではないか！」と学友同志は現実の不利を強く否定し合ったが、心は激しく動揺していた。帰宅途中の道々には不穏な空気があり緊張した。

八月十五日は殊のほか暑かった。茶の間のラジオは「本日、正午に重大放送あり」との予告が繰り返して流されていた。忠君愛国の精神にこり固まっていた私には、今日の重大放送は、「徹底抗戦、玉砕戦に備えよ」という放送だとして考えられなかった。

正午の放送に家族全員は緊張した。時報が鳴り、「只今より重大放送があります。ご起立願います」に続いて『君が代』が演奏され、情報局総裁の「謹んで玉音をお送り申し上げます」との挨拶があった。師範出の母が小さい声で、「玉音とは天皇陛下のお声のことだよ」と説明したので、私と姉は直立不動、背筋と手先をびーんと伸ばした。

やがて玉音放送が始まった。私は茶の間下の土間で頭を垂れた。雑音の中、低く重く不明瞭な声が長々と続いた。私は「今のは本当に天皇陛下のお声なのか、今後は一体どうなるのか」という不安から次第に混乱虚脱状態に変わっていった。もともと国民服やゲートルが嫌いで、防空演習が苦手なりべラルな父は、「戦争は終わった」と落ち着いた表情だった。玉音放送は、軍国少年には意味不明瞭であったが、終戦であるらしい事は感知できた。夜になり、放送の内容は「終戦の詔勅」と分かり、我が人生衝撃の一日は終わった。部屋の防空暗幕は外され、久しぶりの明るい電球はまぶしかったが、それでもまだ「大日本帝国の敗戦」は信じたくなかった。

翌十六日早朝、数人の中国人が家の畑にある防空壕の竹枠を、燃料にするためか、勝利のあかしにするためか、壊し始めた。「壕はまだ必要だ。壊すな！」と一人で制止したが、問答無用、形勢逆転に悔し涙を流した。同日昼、暗い気分で工場寮の荷物を引き取りに行った。既に工場入口では、赤い腕章をした中国人数

人がガードしていた。

十七日朝、父母の「もう陸戦隊に行く必要はない！」の声を押し切り、ゲートル姿で江湾路の陸戦隊本部に向かった。「戦争完遂、徹底抗戦の緊急動員！」の緊張感と、その一方で「終戦か？」の期待感という矛盾を抱きながら集合した。内庭には、中等学生が二百人ほど集合していた。程なく、陸戦隊司令官の終戦宣言と励ましの言葉があった後、あっけなく即時解散になった。一体何のための集合か、帰り道は意気消沈、終戦を認識せざるを得なかった。

四 緊急物資輸送の労役

同日十七日の夕、学友電話網で「米支連合軍が近日中に進駐する。それまでに、匯山碼頭（ウェイセイモードウ）の日本軍需倉庫に貯蔵している物資を、在留邦人に緊急分配する。中等学生は明後日に二十日から数日間、作業を応援せよ」と至急報があった。私も電話や自転車で次の学友宅へ連絡に走った。

二十日、黄浦江沿いにある匯山碼頭の軍倉庫に行くのと、かます入りの米、メリケン粉、砂糖、乾パン、牛

缶、サイダー、ぶどう糖の塊りなどが、整然と大量に貯蔵されており驚いた。トラック等あらゆる車両が動員され、私は大八車に物資を満載し、二人一組で屈強な苦力（労働者）を度胸よく叱咤激励して運搬した。わずか十四歳の身には、木刀を持っていてもいつ暴徒に襲われるか分からない道々は不気味で、内心怖かった。荷は北四川路の第一日本国民学校の講堂や教室に山積みした。校庭は出入りの車で混雑し、熱気と切迫感に包まれたが、皆一致協力した。婦人会は緊急の炊き出しで握り飯を配った。これらの軍需物資は、残留邦人引揚げまでの貴重な食糧になった。私は二日間の報酬として、黄包車（ワンポーツオ、人力車）二台に米、砂糖、乾パン等を満載して、疲労困憊帰宅した。当時の我が家は父母、姉二人、弟三人の計八人の大家族なので、この食糧は数カ月分の糧となり、両親を大変に喜ばせた。私の人生における、初めての稼ぎであった。

既にわが国は八月十日朝、ポツダム宣言を受諾し、連合軍に降伏した事を知る。鉄条網が張られた近くの

空き地では、憲兵隊員が書類を焼却する煙が一日中空高く上っていた。

五 米支軍進駐と日僑集中営集結

八月下旬、米第七艦隊が黄浦江埠頭に接岸し、米軍大型輸送機が威圧するかのように超低空で飛来した。少年は、初めて見る巨体機と星のマークで、やっと「終戦」から「敗戦」の現実に目ざめた。

九月上旬、第三方面軍総司令湯恩伯上將が率いる国民党軍と、米軍が進駐してきた。ジープに乗り近代式装備でスマートな米軍と国府空軍。これに対し、国府奥地軍の風体は、わらじやズックの靴を履き、布団、鍋釜、洗面器をてんびん棒で担ぎ、まさに鎧姿の武士と百姓一揆の隊列を見る思いで、敗戦に対して内心複雑であった。また、湯恩伯上將により「在留日僑は指定地域である虹口（ホンキェウ、元共同租界の日本人居住区）の集中営に移住すべし」と布告された。父は、すぐさま虹口の集中営指定地域にある家屋を探した。幸い、父の友人である軍御用達軍装品店経営の茨木氏のご厚意で、小さな倉庫の二・三階を間借りす

る事ができた。

当時の我が家は、上海事変の激戦地・閘北（ザッポ）にあり、昭和十五年秋に集合住宅路地に改築した塀高黒門門付き家屋であった。父は即刻、書斎の机、椅子、七色のタイル張りの豪華な応接間一式、氷冷蔵庫、風呂、そして和たんす数竿を、中国人家主に、中央儲備銀行券四百五十万円で譲渡した。家主は父母に送別宴を張ってくれたうえ、引越しの護衛にと路地内の中国人女ボスを紹介してくれた。

六 動乱で父母の底力に一目

私は二歳に近い昭和七年一月に勃発した第一次上海事変では、海軍陸戦隊本部に近い寶楽安路（ドゥエローエール）二百三号の自宅付近に銃弾、迫撃砲弾が雨あられの如く落下し、父母は幼い私と姉二人を抱えて階段下に避難し、布団をかぶって耐えた。ついには、父の勤務先である徐家匯虹橋路の東亜同文書院の校舎も全焼した。

更に、昭和十二年七月七日、夏期休暇で日本に帰る途中、第二次上海事変が勃発し、十一月には書院の校

宅は放火され、またまた全財産を失った。父は、焼けた跡から真つ黒に焼けたじょうろ一個を見付けて無念の思いの記念品とした。

今回も父母は、動乱戦火をくぐり抜けた逞しい度胸と経験を發揮し、この緊急事態に際しては沈着冷静、即決即断で対応が手慣れていた。手早く柳行李、フアイバートランク、布団袋、先祖の位牌、写真、学校証書成績表、書籍などを大八車数台に積み込み、家主紹介の中国人女ボスの護衛で、虹口の日僑集中營に向かった。途中、中国人の浮浪者が何回も群がってきたが、女ボスの甲高い怒声一喝で追い払い、安全に呉淞路東長安里四十五号に無事引越してきた。路上で略奪を受ける邦人が多い中、家具類を家主に売却し送別宴まで受け、さらに完全輸送できたのは、父母の日常の人柄と国際性の成果であろう。日頃の父の性格では考えられないその手際と対応の良さに、さすが父は苦勞人の老上海であり、現地の性格習慣に通じた中国通と、私は日頃の反抗から一転して、以後一目置いた。

引越し先は、やはり集合住宅路地内にあり、表門は

高い黒扉で太い門かんばんまが付いていた。一階は倉庫で、軍装品の革屑の大袋が山積みされていた。革屑とは軍靴、帯剣ベルト、馬具、将校長靴の切れ端などである。裏門が通常口であり、一階を倉庫と間仕切りしてトイレと粗末な風呂を急造した。二階は八畳間と間仕切りの台所。三階は六畳間の三角型屋根裏であった。廃物利用として、風呂の燃料にこの革屑を活用することにした。これを燃やすとじりじりと黒く焼け縮み、にかわ臭かったが火持ちが良く、風呂が沸かせるだけでもありがたい！と大量の革屑に感謝した。

七 集中營内の喜怒哀楽

邦人紙「大陸新報」には、九月九日に南京で支那派遣軍總司令官・岡村寧次大將と、国府軍總司令何應欽將軍との間で、降伏調印が行われたと記載されていた。日僑自治会長（日僑互助会）には特命全權公使の土田豊氏が就任し、華僑の名を模して日本人は「日僑」の腕章を左腕に着ける事が義務付けられた。「日僑集中營」とは、割と自由な日僑收容テリトリーであるが、日僑はこの地区からの外出を禁止された。

既に八月十五日の重慶放送で、蒋介石總統は声明を発表し、中国国民と兵士に対し「報怨以德（怨みに報いるに徳を以てす）」と訴えていた。また、九月発行の邦字紙『改造日報の日僑帰国案内』の巻頭には、蒋介石總統の「余の対日方針」として、次の文が掲載されていた。「中国抗戦の敵は日本軍閥であつて、日本国民ではなかつた。中国軍民は和平を愛し、かつ軍閥の圧迫を深刻に被つた諸氏に対しては、終始利害を共にする良友とみなし、満腔の情熱と期待とを抱くものである」と。この声明で、奥地の邦人撤退はスムーズに行われ、集中営内の邦人密度も上昇した。揚子江上流の武漢三鎮、長沙、南京や杭州などから、日俘（日軍捕虜）も、上海郊外の江湾市政府広場に続々と集結してきた。

日本軍票は無価値となり、流通紙幣である儲備銀行券は、中央銀行券（法幣）と二百対一の交換比率となった。物価は日ごとに暴騰し、インフレ経験のない邦人は戸惑った。

つい先日まで、軍国精神を厳しく教えていた学校教

師も、露天商や屋台付きリヤカーを引いて、焼鳥屋や飲み屋のオヤジに大変身していた。某君は小さな妹を連れ、練り飴、大福餅、煙草を入れた箱を首から吊るして行商をしていた。日僑のほとんどが売り食いの竹の子生活であり、大道に着物、陶器、書籍などを並べ、帰国までの生活費稼ぎに必死であつた。

某日、丁輪船の重役二人が、「かくまってくれ」と家に飛び込んできた。彼らは、狭い屋根裏隅に上半身裸であぐらをかき、一升瓶を抱え、震える手でコップ酒を飲み続けていた。数日後、居場所を嗅ぎつけた朝鮮人の一団が、企業閉鎖による退職手当要求のため押しかけ、激しい交渉が行われた。大会社の社長重役といえども、しよせんは権力、肩書、学歴を取ると無力な裸の姿であることを目の当たりにした。このような終戦処理上のトラブルは死傷事件にまで発展し、邦人企業経営者は大変な危険と心労を味わっていた。

昭和二十年十一月には、学校側と父兄の要望で、保甲学校と称する寺子屋が、営内十数カ所の里弄（路地）に開校した。

十二月五日、引揚げ第一陣明優丸が出航。生徒も次々と米軍LST（戦車揚陸艦）などで引き揚げ、保甲学校は翌年三月末に閉校となってしまった。残った生徒はすることもなく、露天手伝いや安物映画などで、抜かれた魂の空白を埋めていた。

男の子なら、街での商売もさほど危険がないので、残り少ない一家の家財売却は、私は一手に引き受けることになった。「買洋瓶！（マーヤンビン）洋瓶有否？（ヤンビンニューアー）」と大声で路地を回る中国人街頭古物屋と仲良くなり、古着や父の蔵書などを売却しては、母に帰国準備金として渡した。このヤンビン屋の中には、なかなか愛すべきやからもいた。某日、彼の家に交渉に赴くと、目の前でやおらズボンを下ろすやいなや、部屋の隅の馬桶（モードン、便器）に跨ったまま、悠長に価格交渉を続けたのには驚いた。日中両国の生活習慣と感覚の差異を強く感じた。彼は、日本の火鉢は店頭の米入れに、和たんすは漢方薬棚に、和服は米軍のスーベニア用に、革靴の片方は障害者用にと、どんながらくたでもよく買ってくれ

た。彼の廃物利用の発想と知恵、商魂の逞しさには、これまた大変に教えられるものがあつた。

二十年の暮れには、文無し在留邦人の正月餅代捻出のため、中華壺圓銀貨の闇売りを請け負つた。日僑腕章を外し集中営を抜け出して、大世界娯楽場横の路上闇市場で売却したが、巡捕に追われて逃げ回つた。金融取締令のため捕まつたら銃殺！と後で聞かされぞーつとした。

ある日、残留組の中で第六国民学校理科の恩師である、池田富太先生に偶然お会いした。先生ご一家も竹の子生活であつたが、得意の理科の知識、特技を活用し、大福、あべかわ餅、甘酒などを製造し、幼い娘さんを連れて、ゴム長靴姿で愛想良く管内を売り歩いておられた。「あの偉い先生がこんな事までして、時代は大きく変わった」と、その変身ふりと逞しい生活力に感心すると共に、生き抜く意欲を刺激された。その後先生と、接収済みの日本酒工場から清酒の一升瓶詰めと運搬を手伝う事になった。おかげさまで、海量酒鬼（ハイリヤンチュウウクイ・酒豪）の風評まで戴い

た。

明けて二十一年、中文紙『大公報』や宮内邦字紙『改造日報』には、南京・汪兆銘政権時代の漢奸狩りや、米軍日本進駐、A級戦犯逮捕等が掲載されていた。昭和二十一年一月二十二日夕刻、引揚船江ノ島丸が、舟山列島沖で磁気機雷に触れて沈没するという痛ましい事件が発生し、引揚げ待ちする人々の前途にショックと不安を与えた。幸いほとんどの人々が付近を航行中の米軍輸送船に救助されたが、その中には学友のI君やF先生、S教官もおられた。営内の邦人はタオルや石鹸などの救援品を、わずかながらも提供した。

八 スター李香蘭と集中營の華清池

二十一年三月某日、父から「李香蘭（リーシャンラ）ン）小姐が、うちの路地向かいの日の丸旅館に極秘でいる。この書類を届けてくれ」と言われて一通の封筒を渡された。突然の事で私はびっくりした。李香蘭と山口淑子さんの父上である山口文雄氏は、父の北京留学時代の先輩であり、中華電影社長の川喜多長政氏

も留学時代の学友であった。彼女が映画スターとして名声を博し、『白蘭の歌』『支那の夜』『上海の月』の撮影のため、昭和十五年頃から上海に來られ、父は上海有名人士を紹介したり親交が深まっていた。昭和十七年、閩北の我が家にも数回來られ、父は彼女にアヘン戦争映画『萬世流芳』の中国語せりふの発音を教授したり、豪華なアスターハウスに一家が招待されたこともあった。

しかし、終戦により事情は一転し、彼女は漢奸容疑で軟禁の身となり、真冬の国民政府高等法院で軍事裁判が始まった。判決は内外には一切公表されず、一般邦人として隠密裏に引き揚げ帰国したという噂話を知り、ほっと安心していた時である。まさか、その李香蘭が、すぐ向かいの里弄の奥にいるとは……。向かいの里弄とは、あのカレー味で香りの良い洋葱麵店の奥ではないか。私は急いで駆けだした。日の丸旅館の入口には紺色の中山服を着た国民党の護衛らしき男が立っていた。上海語で「山口小姐はおられますか」と聞くと「おられますよ」と何の警戒もなく返事があつ

た。案内された部屋は四畳半くらいで、若い女性が休んでいた。「誰呀！（シェイヤー）」と、玉を転がすような美しい北京語が跳ね返ってきた。「影山澈です」と答えると「まあ！とおるちゃん」と絶句し、薄ピンクのカーディガンを羽織って座り直した。当時の日の丸旅館には作家の堀田善衛、日経新聞の緒方俊郎、朝日新聞の林俊夫、室伏クララなど文化人諸氏が七、八人たむろしていた。ある夜、父に「澈、李香蘭小姐を家のお風呂に呼んであげよう。姉さんでは危ないから、お前が目立たないように案内して来い」と言われた。清潔好きの日本人にとって、狭く不自由な営内での風呂は誠にありがたい。「うちの風呂に入るようにと父に言われて迎えにきました」と言うと彼女は大喜びで、小雨の中、路地の四囲を警戒しながら、二人はしっかりと腕を組んで走った。「おじさま、多謝多謝」「おばさま、いいお湯で生き返ったわ」と弾んだ綺麗な声が聞こえた。李香蘭の入った風呂は、我が家の自慢で誇りとなった。楊貴妃が湯浴みした西安の「華清池」を我が家に持ち込んだようで、その後もらい湯に

きた人々は「美人湯に入った」と言って、集中營での苦勞を洗い流した。

二十一年三月末、彼女は川喜多氏の支援のお陰もあり、雲仙丸で無事帰国された。家には素人ぼく写った彼女のパスポート写真が数枚、ボツンと残されていた。

九 日僑子弟補習室の明るい歌声

父は在華三十五年の「老上海」であり、今更八人の大家族を連れて、荒廃し飢餓に苦しむ祖国に帰っても生活ができないので、できる限り上海に残って、何とか食いつなぐことにした。父は中央宣伝部対日文化工作委員会に飯の席をおいた。父は行く学校の無い我々に自宅で自著の『速成北京語』や『急就篇』により、北京語四声の基礎訓練と会話の特訓を毎日厳しく行ってくれた。

やがて江南にも春が訪れたが、草木萌える季節に背き、何人もの日本軍人が戦犯の罪名で、三国志時代の残酷刑さながら、墨黒々に大書きした罪状札を背負われ、トラックの荷台前に立たされて、市中を引き回

された。罵声を浴びせる見物衆の後ろで私は合掌した。この後、競馬場で公開銃殺され、日僑僧侶が遺体の引き取りに行く、という暗く悲しい状況が続き心が痛んだ。作浦路（ソプール）の西本願寺には、邦人や戦犯の遺骨が安置され、本堂には日本図書が十数万冊も山積みされていた。私は時折、和尚を助けるため、整理に向ったが、堂内は森閑静寂、和尚の読経と線香の煙が流れていた。某日、恰幅良く、いが栗頭の第三方面指令湯恩伯上將が、寺の状況視察にこられた。彼から親しく北京語で幾つかの質問を受けたが、あの方くさんの遺骨と凶書は、その後どうなったであろうか。

やがて集中營の管理も緩和され、虹口吳淞路を中心に、紡績や化学などの技術者数十人と家族が残留した。五月には管内生活も落ち着きを取り戻した。残留邦人が少なくなるにつれ、「自治会」は解散され、二十一年八月には「残留日僑互助会」がそれに代わり、会長には元書院教授、満鉄顧問歴任の山田純三郎氏が就任した。彼は、中国革命の父と言われた孫文先生と

交遊があり、彼の臨終に侍した逸材である。

吳淞路義豊里の二階建一軒家には、小学・中等生徒六十人ほどの上海残留日僑子弟補習室が開校された。

主任は英語教員の高田久寿先生であり、国語、数学、物理、華語の教師は、元・蒙古浪人、化学技術者、外交官など多士済々の素人先生であった。補習室名は対外的に遠慮したためか、老上海の内山完造先生の命名で、「童話会」と当たり障りのない名がつけられた。

日系二世ミセス貴志子中山の日曜学校や素人コーラス団も出来、お互いの無為無聊を慰め励まし合った。

コーラスの指導指揮は元・銀行員の安井三郎氏であり、歌は、ふるさと・荒城の月・椰子の実・植生の宿・流浪の民雀・美しく蒼きドナウ・菩提樹・ハレルヤ・ウィーンの森の物語などの名曲ばかりであった。

帰国後、日本映画『ビルマの堅琴』『南の島に雪が降る』などを鑑賞したが、画面では、ふるさと・荒城の月・誰か故郷を想わざる・植生の宿などの合唱が流れていた。敗戦で相互の連絡は途絶されていても、同じ歌が南方やシベリアの収容所で祖国を偲んで歌われて

いた事を知り、感慨無量、面々が涙で曇った。そして、どんなに遠く祖国を離れていても、日本民族が抱く郷愁とメロデー、そして心優しい情感は共通である事を認識した。現代で言うアイデンティティーの再発見である。

十 狂乱インフレと庶民の知恵

二十三年になると、法幣が乱発され、物価は超インフレを通りこして「狂乱インフレ」となった。五月の私の『中学生日記』の記録では、米一担（五十キロ）六百万円、白糖一片（五百グラム）十五万円、革靴百五十万円、大餅（ターピン）一枚五千元、美女牌棒冰（美女印アイスクャンデー）一本二万円、高級靴下一足三十万円、LUX石鹼一個十五万円、コココーラ一瓶三万円、引揚げ荷造り用太縄一束百万円と記録されている。食料品の値は一日一時間ごとに暴騰し、買い物時には札束を大きな網袋に入れて担ぎ歩いた。一般の中国人は生活防衛のため、金條（金の延棒）、米、綿布、油を隠匿し、うなぎ上りのインフレを自己防衛した。最も感心したことは、戦国中華五千年の戦

乱を耐え抜いた庶民の知恵なのか、毎朝の庶民必需食である大餅や油條を値上げした当日は、倍ほどの大きさにして客を大満足させる。しかし翌日からは日毎に小さくなり、四、五日経つと元の小さな形に戻る……という、まことに具体的な小売側の「顧客を食った（？）」インフレ対策であった。

一方、街には米軍の闊放出物資が流れ、道端にはハーシーチョコレート、ビーフ缶、軍服までが山積みされていた。米軍の「クレーション戦場携帯食」にはビスケット、ハムエッグの小缶、ラッキーストライク六本、インスタントコービーとシュガー袋、ガム三枚がセットされていた。日本軍の麦飯、梅干しの粗食に比べて、米軍のぜいたくさと凝縮された中身の工夫と合理性に驚いた。

我が家の大家族は、中身が遊離した米軍放出バター大缶や、石油缶入り乾燥ポテトをお買い得品として常食としたが、食べ終わった数日後にはこの空き缶類が暴騰し、購入価格よりもはるかに高値で売れた。結局、中身はタダというインフレ珍現象が生じた。空缶

と放出品の売買は私の専業であり、これが我が家のインフレ防衛対策となり、おかげで長期間、大家族が食いつなぐことができた。

十一 国民党の腐敗と家取り攻防戦

当時の大陸情勢は、毛沢東共産軍が内陸からじわじわと侵攻し、蒋介石国民党軍は沿岸都市へと追い詰められ、インフレは高進し、人心も離反しつつあった。この混乱期に乗じ、正体不明の「和平救国軍」や偽軍人官僚が横行した。特に、国民党の一部悪徳官吏や軍人は「台湾高飛びまでのどさくさ荒稼ぎ」「毒くわば皿まで」とばかりに、官職を詐称しては悪事を公然と行った。日僑家屋に因縁をつけては、不法強制接収の蛮行が連日行われた。訴える機関は存在しても悪代官同様、収賄要求か逆効果であり、日僑は彼らを「家取り」と称して警戒し恐れた。昭和二十二年十二月初旬、突然、国民党は文豪魯迅の老朋友（ローベンユー）である内山完造氏を強制送還し、中共軍がじわじわ上海に迫っている危機を自ら証明した。

同じ頃、守りの固い我が家も、家取りどもに虎視

眈々と狙われ始めた。長梯子を二階に掛けて窓から侵入を図られ、上から水を掛け梯子を蹴るという攻防戦も演じた。

二十三年初冬、玄関先に元・早大留学生で国府軍将校と自称する男が背広姿で来訪し、日本語で巧みに話しかけてきた。ちょっと戸を開けた瞬間、物陰にいた暴漢五、六人があつという間に荒々しく押し入るや、二階に駆け上がり、畳をベッド状に積み上げて居直った。ついに、家取りにまんまとやられた訳である。翌日、一階倉庫には米軍様空軍制服を着た若夫婦が住み込んできた。笑えた事には、某日、部屋の電気ヒューズが切れたが、彼には修理が全くできない。これで、彼の身分証明書と空軍兵は「偽物」の馬脚を露呈した。

このようなあくどい強奪方法で、生活にあえぐ日僑の資産は次々に没収されていった。

ついに我々八大家族は、三階の屋根裏六畳半に追い込まれ、数段に積み上げた行李の上で寝る日々が続き、帰国せざるを得なかった。

しかし、心温かい中国人もたくさんおられた。実業家の王永鐘先生は陣中見舞いでコーヒーや牛鬆（牛でんぶ）などを持参。漢方名医の費子琳先生は診察を。

文学者であり父の『現代笑話』の共同著者である蔣君輝先生は、父母を自宅に招待し、あえて古いミシンや置き時計を高値で購入して下さった。また、父が街の電柱に張った「日語補習」を見て、中国青年が数人來宅した。父は狭い座敷で生き生きと無料で教えた。

二十三年三月二十日、めでたく中等科五年修了の卒業証書を頂いた。発行者には「上海徵用日僑技術員工連絡所主任、山田純三郎」の名が記載されていた。引揚船の上海寄港が多くなるにつれ、船員から、並木路子の「リンゴの唄」、田端義夫の「かえり船」などが、祖国で大流行していると教えてもらった。

引揚げ時の持ち物は一人行李三十キロに布団袋とリュックサックのみと制限されていた。

日本からの便りでは、都市は爆撃で焦土と化し、飢餓地獄であり衣料不足とのこと。帰国後の物々交換用として、モンサントのサッカリンなどを布団袋の底に

隠し、タオル類はリュックサックの背バンドに沢山巻き付けるなどして、帰国の準備を始めた。

帰国の準備行動は、二階占拠の「家取り」悪党どもには隠密裏にする必要があった。真夜中、例の古物商ヤンビン屋を家の外に待機させ、別室裏の二階台所窓から、ロープで家財、カーベット、鉄窓枠などを静かに吊り下ろし、次々と売却した。家取り野郎どもは引揚げ当日の朝までこの事に全く気が付かず、後でもぬけの殻に驚いたことであろう。これこそ、中学生向きのスリルある復讐大作戦であり、わずかに溜飲を下げた。

十二 引揚船は海王丸、青島経由で帰国

父は大学教授、会社顧問の経歴のためか、引揚団長に指名された。父は固辞したが引き受けざるを得なかった。結局は陰の代行者として長男の私が走りまわる事になった。

昭和二十三年五月十六日、海王丸が四百人の台湾日僑を乗せ基隆から寄港した。平和な現在では「優雅な海の女王」としてもはやされる練習船であるが、当

時は引揚船として大活躍したのである。戦後初めて見る鮮やかな日の丸を船尾に見た時は、目頭が熱くなり、私は忘れかけていた祖国愛を再び蘇らせた。

家族八人は胸に大きな名札を付け、一人では立ち上がれないほど重い大型リュックサックを背負い、雁山碼頭で国民党官憲の荷物検査を受けた。私は戦闘帽に海軍上衣、姉たちはモンベ姿であり、母はなぜか後生大事に大きな目覚まし時計を首からぶら下げていた。

碼頭には日本語の弟子、余保羅さんが見送りに来られ、撮りにくい状況下、写真を撮ってくれた。

五月十七日早朝六時出航。朝露にそびえたつブロードウェイマンションに別れを告げた。船上ですぐに防疫が行われた。

五月十九日早朝、山東省の青島に入港。埠頭では旧日本海軍の台湾兵が、船内の台湾引揚げ邦人に会わせろと多数押しかけ、国民党憲兵ともみ合う場面があった。多分、彼らは知人の消息と二・二八台湾人虐殺事件のことを知りたかったのではなからうか、と後々推察した。

二十日、青島乗船組の荷物検査を船上から見物したが、国民党官憲が十数個の荷物を没収していた。彼らの横暴は上海と同じであり、彼らの大陸敗退を予測した。ここ青島では、邦人と復員兵約百八十人が乗船し、私も埠頭に降りて船倉荷揚げを手伝った。彼らからお礼にと高粱酒が届けられた。小柄な私は船室の鉄骨天井によじ登り、そこを巢穴にして下手な字で中学生日記をつけた。同日二十時出航。船内は一般邦人、復員兵、戦犯釈放者など数百人で、まさにすし詰めであり、熱気と臭気むんむん、そのうえ赤ん坊の泣き声が暑さを一層増幅させ、病人も多数出た。それでも祖国に帰れるという思いから、皆苦痛に耐え、努めて明るく談笑した。

十三 佐世保・南長崎に上陸

乗船から既に一週間が経った五月二十三日朝、佐世保沖に停泊。大村湾の美しい紺碧の海、霧の中に浮かぶ荘厳な九州の島々や山並みに皆感動した。午後、病人下船、船上で再び検疫が行われた。

二十四日は甲板で、乗組員主催の演芸会が開催され

た。赤城の子守唄・勘太郎月夜・旅笠道中・湯島の白梅などの演歌や落語で賑わい、万歳三唱して無事の帰国を祝った。

翌二十五日、平船で対岸の検疫所に行き小荷物検査を受け、真っ白なDDTの粉を頭からぶっかけられた。更に荷物運搬船に乗り換え、やっと佐世保市南風崎に上陸する。棧橋では、久しく見なかった和服に純白エブロン姿の地元婦人会から、温かいミルクと慰勞の言葉や歓待を受け、祖国帰還の感激と強い同胞愛を感じた。

収容所は針尾海兵団跡であり、広間で皆ごろ寝をした。食事はイワシ（缶詰）の炊き込みご飯や、今まで見た事もない真っ黒なパン等であったが、これが意外においしかった。

二十六日の税関検査では、後生大事に持ってきた米軍缶詰が没収された。私は団長の代役として、事務、運搬、徹夜の荷物監視と忙しく働いた。

二十七日朝、南風崎駅で託送作業を手伝う。駅では当時の自称第三国人による、台湾引揚組の貨車荷物襲

撃大乱闘事件を目撃した。彼らの横暴さに驚き国内の治安悪化を認識し、以後、荷物盗難の警戒を強めた。午後、全員にセッケン、歯ブラシ、ちり紙が配給され、一人千円の引揚者手当金も交付された。（昭和三十三年末に県知事より、引揚者給付金認定通知があり、一人七千円の国債が給付された）

二十八日、男子には軍の放出品である軍服、軍靴、ゲートル、靴下、毛布。さらには少年の私にまで越中褌が配給されおかしかった。女子には日用雑貨、モンペ、下駄、作業着、毛布。子供には学生服、帽子、運動靴、毛布などが配給された。その他、旧軍隊の元気食とかいう特殊口糧、昆布、ビタミン剤、針糸なども頂いた。

同日夕、収容所では復員兵主催の祝賀会が開催された。題目は、引揚船上で聞いた演歌から、詩吟と浪曲が主役となり、この日本調への変化は祖国帰還の安堵を示していた。最後に、団長の父が解散の辞を述べた。

十四 福岡での耐乏生活

二十九日、南風崎駅を出発。博多駅までは佐世保引揚援護局員と学生同盟員の親切誠実な奉仕活動を受け、祖国の温かい人情に大感激した。本来、父母郷里は千葉、埼玉であるが、在華三十五年の今は浦島太郎であるので、上海に近くて知人も多く、食糧と人情豊かな博多で下車する事に決めていた。

父の教え子であるK自動車向井社長の出迎えを受け、その夜は東中洲のホテルに一泊した。閩米の銀しゃりにありつき、祖国の味をかみしめた感謝の一夜であった。

数日後、福岡市郊外にある早良郡原村農家の十畳ほどの養蚕小屋に落ち着いた。荒廃した福岡は食糧、衣類の豊富な上海の街とは天国と地獄の差で、日が経つとともに敗戦日本の惨めさを実感し始めた。戦後、日本の教育も六・三・三制に変わり、新制高校の存在を初めて知った。私は旧藩高校二年編入に何とか合格し、戦闘帽に軍服下駄履き姿で、片道六キロの道を徒歩で通学した。

十一月、父は引揚団長の重責と過労からか、洗面器

一杯の吐血をし、半年間病床に伏した。帰国時持ち帰ったタオルやサッカリン等を次々に売り食いしては、細々と糊口をしのいだ。日々の食事は配給される水気の多いサツマイモと、だしジャコとメリケン粉玉の「つみれ汁」であり、風呂は片道四キロも離れた銭湯に下駄で通った。上海の生活とは雲泥の差であったが、戦後日本の貧しさは、素朴さの中に爽やかで心に平和な安堵感があり、自力独立へのフアイトが沸いた。

あの集中營で観たMGMカラー映画「風と共に去りぬ」の、スカーレット・オハラが赤い夕日を浴びながら、荒廃した丘で拳を握りしめ、強く逞しく立ち上がる場面を思い出していた。あの南北戦争の廃墟が、今の敗戦日本の姿ではないか！我々も拳をあげて立ち上がろう、と……。

母は、埼玉の実家から秩父銘仙や当時流行の温灸を仕入れ、行商しながら父の大学就職まで頑張った。私も、学費は自分で稼がなければならない。大学受験までは、わずか一年半の勉強期間しかない。東京や大阪

の大学を受験するには旅費も宿泊先もないので、地元
の大学に通うことに決めた。玄関の二畳間にビール箱
を机とし、暖房もない、厳冬にはどてらをかぶって頑
張った。

十五 アルバイトで進学

育英会と大学奨学金のお陰と、アルバイトの努力で
なんとか進学できた。遊興のためのアルバイトではな
く、生活と学費のためであり、大学新聞には「アルバ
イト王」と紹介された。業種は多岐にわたり、ピラ電
柱張り、文具卸倉庫係、メリヤスブローカー、自転車
預かり、陶器店員、酒屋ビール配達、ビンゴゲーム計
算係、映画館改札兼用心棒、引っ越し屋、街頭マッパ
配り、商店街チンドン屋旗持ち、大晦日夜店の金物叩
き売り、雁ノ巣米軍飛行場の建築通訳、家庭教師など
であった。

多忙な中でも、大学自治会執行委員長と中国研究部
長等を兼務した。この時の幅広い経験と知識、忍耐力
性、そしてリーダーシップが、その後の社会人生活に
大いに役立ったことは確かである。

集中營でミシン、置時計を高値で買ってくれた蒋君
輝先生、陣中見舞いの王永鐘先生、その両氏も戦後三
十有余年後、香港から来日され、福岡で父母と感激の
再会をした。碼頭見送りの日語弟子の余保羅さんは、
文革後、桜花絢爛の日本に招待し友情を深めた。

十六 父の『回顧録』に思う

第一次・二次上海事変による戦禍と住宅全焼、決死
の避難、そして敗戦と引揚げによる家屋全財産喪失
と、三度の厳しい苦難の経験をしたが、父・巍の『回
顧録』に次のような悔しさと感謝の記述が残されてい
る。

「第二次上海事変直後（昭和十二年）に『速成上海
語、速成北京語、速成広東語』ほか数冊の著作を出版
し印紙収入があり、将来の子供の教育等の準備として
Y正金銀行に預金したが、戦後の日本貨幣価値の大惨
落、銀行の封鎖、そのうえ出版社や印刷紙型も戦禍に
遭って消滅、無一文となった。将来の家族防衛のため
と思い、貯金節約に励み郵便貯金、M養老保険、D生
命、N生命、M生命に少なからざる金額（当時の貨幣

で計九万円ほど)を全額払い込みをしたが、これらも印税の末路と同じく、すべて敗戦と共にふいになつてしまった。しかし、未曾有の大戦争にほとんど全部の人々の受けた戦禍の中に、家族全員最も危険の多い大陸に、最も強烈な病疫の中に晒されながらも、一人の犠牲の悲劇も作らなかつたことを、幸いと諦めねばるまい」とある。

息子としてもまさに同感である。その後の健闘努力で就職や家族にも恵まれ、お陰様で無事定年を迎え、一家共々幸せである。

ともあれ、満州、中央奥地、内蒙古、北朝鮮、樺太、南方各地で大変な艱難辛苦に遭遇され、多大の犠牲を払われた方々に比べれば、私どもは沿岸大都市の敗戦だけに、まだ甘いものがある。今は亡き父母の大変なご苦労と、これまで健康で幸せに過ごせたことに、心から感謝したい。

結びに、祖国日本を愛し守り、今日の復興、繁栄、平和の礎を築かれた多くの先人に感謝申し上げ、ご冥福をお祈り致します。

私の終戦

大阪府 田中恵子

今年も五十五年目の広島原爆記念日が巡ってきました。毎年八月六日に広島市で行われる記念行事のテレビ中継を見ては、戦争は絶対にしてはならない、子供や孫たちを私が体験したあの悲惨な目に遭わせるようなことだけは、絶対にあってはならないと思うのです。あの戦争で、多くの方が何らかの犠牲を払われたり、不幸を招かれたりしておられると思うと、我が身を振り返って涙が自然と流れてきます。

私は、朝鮮の京城(現ソウル)で生まれました。当時は大日本帝国と言われていたところで、朝鮮にいた日本人はだれもが、日本人としての大いなる誇りを持って生活をしていました。

父は日本放送協会、今というNHKに勤務していた技師でした。母はいつも父の勤め先を通信局と言って